

---

# 三語即興の世界

古河 渚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三語即興の世界

### 【ノード】

N6433N

### 【作者】

古河 渚

### 【あらすじ】

三語即興文とは、三個のキーワード＝お題 を聞いて、すぐさま、その三語を入れて作製されたショート・ショート作品です。その時々で、サスペンス風とかミステリー風とかの課題がつく場合もあります。

最初のページに各作品のお題と課題を記載しています。では、お楽しみください。

## 夏の夜風（お題・足音・階段・まくら）

夏の夜風（お題・足音・階段・まくら）涼しげな作品

まくらを濡らして寝たのはいつだつたのだろうか。僕は隣で眠る弘美の寝息を聞きながら、ふと考えた。暑い寝苦しい夜だ。なぎに入つたのだろうか、さつきまでわずかに吹込んでいた風はやみ、どこか遠くで蝉の声がする。

それはもう十五年も前のことだろうか。遠距離恋愛に疲れた彼女が「もう疲れたから別れたい、もう電話をかけてこないで」と言った夜だろうか。

振られたからじゃない。自分がふがいなくて泣いたんだ。

僕は翌日飛行機に乗り、海を見下ろす君の家まで長い長い階段を歩いたんだ。

「電話じゃなくて、直接弘美に言いたくてここに来た。僕と結婚してほしい」

あれから、いろいろあつたけど今君はここで寝息をたてている。階段を昇つてくる足音が聞こえた。きっとまた息子が夜更かししたんだろう。

なあ俊介、あのときに、ただ泣くだけで終わっていたならばお前はここにはいなかつたにちがいない。

その時、やつと一陣の風が吹込んだ。

「ちがうよ。僕がいるから、二人は結ばれたんだ」

風の中でそんな声が聞こえたような気がした。どこかで風鈴がチリンと鳴いた。

## 調査（お題：注射，冷凍庫，バタフライナイフ）

調査（お題：注射，冷凍庫，バタフライナイフ）サ  
スペンスタッフで

奇妙な調査依頼だつた。新しく開院された病院のことだ。依頼者は「あの病院には秘密がある」と言った。俺は、医院長が不倫でもしている？ 看護士が薬を横流ししている？ 医院長の奥さんが若いレントゲン技師を誘惑している？ いろいろな可能性を質問してみたが「わからない、でも何かがおかしいのよ」の一点張りだつた。俺は、情報を集めるために潜入することにした。今日は、依頼していたインフルエンザの予防注射をする日だ。名前が呼ばれ診察室に入る。

先生は予想に反して、若い女医さんだつた。美人である。  
俺の小学校時代の記憶が確かなら、インフルエンザ予防注射はものすごく痛いはずだ。注射器の針が近づいてくる。俺はおもわず眼を塞いだ。

「先生。俺、痛いの苦手なんですよ」と女医さんに甘える予定にしていたのだが、知らない間に終わつていた。

俺は、その夜病院に潜入した。たしかにおかしい、いつ針が刺さつたのか判らない、いつ終わつたのかも判らない注射は奇妙だ。俺は小型懐中電灯を手に診察室の扉を開いた。ポケットにはバタフライナイフを忍ばせている。誰もいない。椅子に女医さんが着てたらしい白衣がかかつている。俺は白衣の匂いをかいでみた。これは本能で調査とは関係ない。

俺は記憶を確かめる作業に移つた。超小型の海馬がフル稼働する。たしか…、俺が部屋に入った時…、雑談を始める前だ…、女医さんは「冷凍庫から、あれ、取つて来て」って誰かに言つたんだ。  
怪しい、あの冷凍庫はもっとよく調べる必要がある。

俺は部屋のすみにある冷凍庫の扉を開いた。

「予防注射用表面麻酔 : 使用前に解凍してください」  
これで調査報告書を書ける。俺は安堵のため息をはいた。

## 存在意義（お題・地球規模 - うちわ - マフラー）雨の日の話で

「あなたも地球規模の異常気象を体感するのよ。それも今すぐ」  
朝のワイドショーを見ていた妻が冷たい田つで僕を見つめている。滞在先の部屋に散歩から戻ってきたときのことだった。

僕らは涼を求めて軽井沢のペンションに長期避暑にきていた。浅間山が良く見えるここ北軽井沢は、連日テレビで放映している関東地方の酷暑とは無縁なのだ。とても涼しくて、毎日近くの広葉樹林の中を数時間ゆっくりと散歩できる。今朝の山は霧に煙っていたが、弱い霧雨が降る中を小説の構想を練るために傘をさして散歩にでた。鳥の鳴き声を聞きながら歩いていると、たまに深い林の中に鹿を見かけることもある。ペンションに戻ったときも雨は弱いながらも降り続っていた。

「どうしたの？ そんな唐突に」

「ねえ、人がバタバタと倒れている時に、さわやかに避暑を楽しんでるのはへんよ。少なくとも、もつじぼひへこひへこたいな熱中症を体験する義務があるわ」

妻はきっぱりと言い放った。きっぱりとした性格なのだ。

「ああ、でもどうやって体感すればいいのかなー」

「これよ。これを使うのよ」

見ると、妻の手にマフラーが握られている。

何でマフラーがここにあるのかはわからなかつたが、質問はしなかつた。質問すればするほど、奇妙な物が後から後から出てくるのだ。僕はその赤いマフラーを首に巻いて異常気象の体験とやらを始めたのだ。

「汗がバンバン出て、酷暑の存在意義がわかつてきたり言つてしまつたのだ。

うだい。うちわで扇いであけるか？」

「ああ、たのむよ」

しかし、酷暑の存在意義には到達しなかった。でも、何でも体感しなくちゃ小説は書けないと思い込んでいた、小説家の妻の存在意義をかみ締めることには成功した。

## 黄金の扉（お題：バナナ，逆説，大学）

黄金の扉（お題：バナナ，逆説，大学）ミステリっぽい話で

スレイプニルとは神オーディーンに献上された馬なのか？僕は真実を探るために研究室を出た。大学の建物は赤茶けた煉瓦づくりだ。一階の窓には鉄柵があり外部からの侵入を頑強に拒否している。ルーン文字の書物を収蔵する施設はこの建物の地下深くにあると聞いていた。

あそこに籠れば三日間は出てこれないだろう。僕はリュックの中に三日分の水のボトルと、チョコレートやバナナが入っていることを確認した。重々しい櫻の扉がゆっくりと音もたてずに開いていき、奈落に通じるかのような螺旋階段が現れる。僕は手にした蠟燭にマッチで火を灯し、螺旋階段のところどころ置いてある蠟燭台に火を灯しながら深い地下へと降りていった。

きっと空間や時間を認識する能力を失わせるためなのだろう。螺旋階段の終わりは永久に現れないかのように感じていた。しかし螺旋階段の終わりは唐突に現れた。

そこには金色の大きな扉があり、その前に白く長い顎鬚をたたえた老人が立っていた。老人は無言で僕に紙を渡した。  
『弓から放たれた矢は永久に的には到達しない。これについて論じてみよ』

ゼノンの逆説だ。老人は顔の笑みをたたえて指さした。煉瓦つくりの壁の一部に大きなパピルスがかかっている。僕は置いてあつたペンとインクを手に回答を書く。

無限回の可算は有限の値に収束していく。僕は長い計算を終了した。

気がつくと老人は消えており、黄金の扉は開いている。僕はその

先に何があるのかを確かめずにはいられなかつた。

決意 (お題・白くま・ルーティーン・蓮)

決意 (お題・白くま・ルーティーン・蓮)

朝起きたらまず、水とご飯を仏壇に供える。目覚ましが鳴る時間もご飯が炊ける時間もお供えをする時間も毎日寸分の狂いが無い。ルーティーンだった。

その日も私は、お盆の上に水とご飯そしてあの子が大好きだった梨をのせて仏壇の前にすわっていた。お供えものをして蠟燭に火を灯すと、奥の三世の蓮が「トト」と揺れる。もう毎日のこととでそれほど驚かなくなつた。

「おはよう、未来ちゃん。そこにいるのね」私は未来の遺影ではなく仏壇の観世音菩薩に声をかける。

未来は半年前に亡くなつた。未来とかいて「みく」と呼ぼうつていつていたあの人も一緒にいなくなつた。溺れた娘を助けようとしたのだ。

「俊介、早く未来をつれていかなくちゃダメじゃない。じゃないと天国にゆく扉が閉じちゃうよ」

一人の笑顔を見ながら涙が落ちる。

「お前が早く忘れないから、未来がお前を心配してるんだよ」

「どうしたらいいのか判らないもの」

「未来が言うんだ。あの大好きだった白クマのぬいぐるみに入るから、青い青い空の日に、蓮華川に流してほしいって」

「それで、あなたはどうするの?」

「うん、川を渡るまでは一緒に行くよ」

「ママ、ママ。また未来ちゃんと話してたの?」

私はハットした。隣に四歳になつた息子が立つていた。

「ねえ、今度お空が青い日に、未来ちゃんの好きだった白クマさんを持つて川にいこう。未来がね。白クマさんと遊びたいから流して

ほしいんだって。裕介も行く？

「うん、行くよ」

私は裕介を抱きしめて、そして、ゆっくりと立ち上がった。

## お燐 (お題・飛び蹴り・オランダ・石灯籠)

お燐 (お題・飛び蹴り・オランダ・石灯籠) お婆さんが主人公で

100-110の闇社会では、お燐ばあさんを知らない者はいなかつた。本名はわからない、いや名前なんて本人だつて忘れちまつただろう。とにかく、婆さんは奉行所役人や捕り物たちに囮まれた危機をなんども投燐丸と呼ばれる灼熱の閃光弾で逃れてきたのだ。それがお燐と呼ばれている由らしい。

お燐ばあさんは、この長崎でオランダからの抜荷を扱う闇の商人だ。ずいぶんと昔になるが、なんでこんな危険なことしてゐるのか尋ねたことがあつた。

「わしは若い頃は切支丹しどつたこともある。命が惜しゅうて踏絵ば踏んでしもうて基督様ば裏切つてしまつたから、その償いは一生せないけんけのよ。そんために武器使いも習つどるし、体も鍛えとるんよ。琉球拳法もそんひとつじや。拳突き、エンピ突き、飛び蹴りなんか名人技じやけど、最後はパードレから習つた投燐丸があるけん、無事じやおもうとるんよ」

丑三つにかかる頃、海岸に近い祥雲寺につづく路に、古い石灯籠が一基建つていた。今夜の取引はそこで行うことになつてゐる。新月の中で黒装束をまとつたお燐たちは、カラスを暗闇に放つたかのように目立たない。やがてオランダからの抜荷を担いだ屈強そうな紅毛人が二人どこからともなく現れた。

お燐は受け取つた箱をその場で開き、小さな蠟燭に火を灯して中身を確認する。微光に輝くロザリオやマリアの絵などに混じり、西洋医学や地図などに関する蘭学書もあつた。キラキラと輝くガラス製の髪飾りを見つけたお燐は、それを自分の白い髪に刺してみる。顔に皺はきざまれていたのだろうか？ その笑顔は少女のように見

え  
た。

## 最後のメモ（お題・柔道・シーズン・くちばし）

最後のメモ（お題・柔道・シーズン・くちばし） 秋の風物を描写

胴着に黒い帯を締めた青年が、落葉が敷き詰められた銀杏並木を走っていく。柔道の大会もあるのだろうか？ いや空手かもしない。私は3年前に失った彼を思い出していた。

私たちは大学に入学してすぐに知り合いました。直人は体育会空手部で私はマスコミ研究会、なぜか意気投合した私たちは付き合つようになっていたのです。

私たちは4年になり。そして秋は学園祭のシーズンでした。あと数日で学園祭が始まるという午後に、私は彼と彼の親友とでお茶をしました。

「なあ優子。今度の日曜日の午後、俺試合に出るから見にこいや」「えつ、日曜の午後はダメよ。マス研で出しているお好み焼き屋の当番なんだ」

「お前、俺の最後の試合見たいって言つてたジヤン」

「そりよ。見たいけど……、もう当番表できてるし……」

本当は、当番なんか後輩に言えばすぐに変われたのです。私は最終日の午後から日暮れにかけての気が狂ったような喧騒を今年も体験したかつただけでした。

「なあ、優ちゃんを困らすなよ。お前の試合は俺が見届けてやるつて」

横から直人の親友で空手部主将の健一がくちばしを挟みました。

「でも、俺たちもう卒業だし、試合はもう見れないんだからな」

それでも直人は少し怒ったように突っかかってきました。

「最後じゃないよ。直ちゃん空手ずっと続けるんでしょ？ だつた

ら、私、来年も再来年も毎年行く……、直人がもう来るなつていうまで見に行くからね「

でも……、もう、その約束は果たせなくなりました。彼は学生生活最後の試合で不幸な事故に遭い、意識を戻すことなく亡くなつたから。

私は泣いて泣いて、友人たちに抱きかかえられながら葬儀場を跡にしたようです。雲ひとつない青い青い空の日だったと、ずっと後になつてから聞かされました。

「もし太陽が昇るのをやめたって、俺は優子を愛するだろ。もし大地が海に沈んだって、俺はずっと君といる。」

あの日の喫茶店で、メモ帳に書きなぐつて渡された言葉を鮮明に覚えていきます。

死が私に追いつくまで忘れたくはないけれど……、でもきっと忘れてしまつでしよう。忘れなければいけないのかもしません。

# SPARKLE (お題:鷹 , 虎 , バッタ)

SPARKLE (お題：鷹  
虎  
バッタ) 誰かが歌  
う話で

「なあ、うまくやれるかなー」

強面の顔をした虎が氣弱そうに詫う。

「……かりしてよ……。ライオンたって一皿おくんでのに、頼りないんだから……」

会話にかこつけて鷹は發

お鷹さん、今日も絶好調だね。七オクターブは出るんじやないか

バッタはそう言つと、首からぶら下げる重そうなギターのチューニングを始めた。

日は、テ

この日は、テプララ森林協会が主催する恒例のロツク・フェステイバルだ。もうまもなくで、ボーカルの鷹、ベースの虎、バッタがギターで、脚が多い蜘蛛がドラムスのグループ「ティンカム」の出番だった。

ヌテリシでセツテインケかすむと話の熊が絶叫した

「お次は、森を代表するバンドの一つティンカムだー。お前ら、耳の孔かつぽじつてよく聞けよー」

ch、ch、chといふバッタの

「ち、ち、ち」というバッタの羽音から、軽やかなギター音が飛び出し空間をカツティングしていく、心地のいい出だしだ。と、稻妻のよつに重低音のベースと乾いたシンバル音が一発が炸裂した完全にシンクロしている。ドラムの蜘蛛は虎に目配せする「やつたな、虎くん完璧なできだよ」そんな声が聞こえたのか、虎のベース音は搖るぎない自信で曲をサポートしていく。やがて鷹の七オクターブの声が森と谷に響きわたつた。

「ウオーウオーウオーーーーー

観客席の興奮は最高潮に達し、森にすむすべての生き物が踊りだした。

いつのまにか会場には酒樽がいくつも用意されている。森で唯一の  
人間、白髪の仙人がつくった不老長寿の酒だ。

森の喧噪は満月が西の空に沈むまでやむことはなかつた。

## 優勝決定戦（お題：遠投，締切，友情）オチのある話で

優勝決定戦（お題：遠投，締切，友情）オチのある話で  
その球場全体を、いや日本中の野球ファンを未経験の緊張感が覆つていた。

伝統の一戦なのはもちろんだが、ペナントレースの最終戦でゲーム差0・5の一位と一位の決戦である。この試合に勝ったほうが優勝だった。ナイターで始まつた試合は乱打戦となり5対5のまま延長戦に入ると、その後膠着状態になつた。

デスクからの「どうなつたんだ。早く記事を送れ」の催促メールが何回も来る。原稿の締切が迫つて来ているのだ。そのとき、15回裏のツーアウトから四球と内野安打で一二塁にランナーが出た。あと一点とればサヨナラ優勝だ。

俺は見込み記事を高速ブラインドタッチで打ち込んでいく。

『巨人の最後のマウンドを死守しているのは、絶対守護神と言われた高橋。しかし、制球難は相変わらずで自らピンチをまねき、ツーアウト一二塁である。ここで、阪神は止まらない快速特急の異名を持つ、青木を一塁走者に送るが、原口監督も手を打つてきた。センターを、遠投が150メートルの強肩でチームメイトから雷神と呼ばれている坂井に変更してきた。前進守備で快速特急を停める気である。そういうえば、雷神と快速特急はかつて同じチームで友情は育んできた仲だつた。運命とは皮肉なものだ。でも、バッターが三振するかもしれないし、打球もセンターに飛ぶとは限らない。と、カウントはいつのまにか進み、ツー＆ツーからの渾身のストレートが外角にはずれた。さあ、フルカウントからの運命の一球である。

高橋の運命の一球はが外角のスライダー、バッター泳ぎながらなんとか当てるど、おつ、打球はピッチャーの足下を抜けてセンター前だ。雷神が猛然とダッシュしてきたが、もう、快速特急は三塁ベ

ースを駆け抜けている。早い。だが、雷神の閃光がひらめけば奇跡がおこるかもしれない。おつと……センター雷神の返球がそれた――。

阪神優勝、阪神優勝です！！！！『

俺は原稿送信ボタンを押した。

おつと、待て待て待て、三塁墨審がアウトの宣告だー？ 有り得ない。アウト、快速特急アウトです。ベースを踏み忘れたのか？あー？ どうなつたんだー？？？ 巨人優勝なのか？そこで眼が覚めた。今年の優勝は中日だった。

祖父母（お題・生き残り・年賀状・「ゴスロリ」）

祖父母（お題・生き残り・年賀状・「ゴスロリ」）

「ねえ、お爺ちゃん、今度の誕生日プレゼント、ゴスロリがいいなー」

娘の沙耶香がお爺ちゃんに言う。私たち夫婦と一人娘の沙耶香とで、お正月に実家に年始に行つた時のことだ。一週間後に娘の誕生日が来る。

「ゴス……、ゴス……、口リ？ うーん、知らんなー。新しいお菓子かね？」

お爺ちゃんは不思議そうな顔だが、にこやかな笑みを湛えて孫娘を見た。彼は御歳八十で、しばらく前までは大学で教鞭をとつていたのだが、世間の流れにはまったく関心がなかつた。太平洋戦争に行くことをからうじて免れた、同世代の貴重な生き残りなのである。「お菓子じゃないよ。ゴシック・ロリータっていう服なんだ」

「ほうー、ゴシック様式の服っていうと、なんかこつー、硬いのかね？」 サクラダファミリアみたいに

「えー、お爺ちゃん、それ混乱だよ。硬いわけないじゃん。ロリータなんだよ。ロリータなんだから甘いんだよ」

「ほうー、甘い服なのか？ ますます解らんな。おい、婆ちゃんやー。沙耶香がゴスロリとかいう固くて甘い服が欲しいって言つてるけど、知つてるかい」

爺ちゃんは、コタツに入り正月のお笑いを見ていたお婆ちゃんに問い合わせた。コタツの上には年賀状の束が積み重ねてあつた。

「ゴスロリですか？ えーえー、知つてますよ。ほら、昔、お爺ちゃんが私に買つてくれましたよ」

「へえー、すごい。お婆ちゃんゴスロリ持つてるんだ？」

「そうよ。沙耶ちゃん。ゴスロリ持つてるわよ。もうずいぶん着て

ないけど」

「ねえ、ねえ、お願い。お婆ちゃん、それ着て見せてよ  
「えつ、いや、いやよー、」スロリは。沙耶ちゃん馬鹿なこと言わな  
いで」

と、言ひながら、じやあけよつとだけよ。嬉々として一階に上が  
つて行つた。しばらくして、階段を降りてくる音がした。

「お待たせー。どう? 似合つてるかしり?」

「うん、いいな。その黒地に白い肌着が見えるのがいい。真つ赤  
な結びが蝶のようで官能的じやわい」

お爺ちゃんが興奮している。

「それ、ゴスロリじゃないわよ。カスリよ  
と、妻の冷静な声が響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6433n/>

---

三語即興の世界

2010年12月28日19時55分発行